

中高層住宅と育児

星 美智子

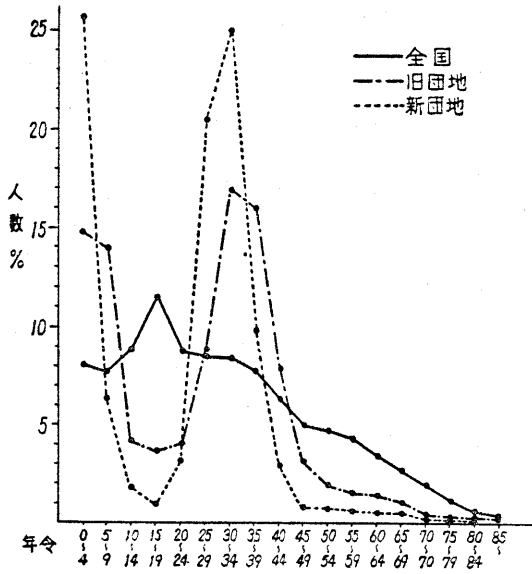
日本の高度経済成長にともなう都市への人口集中化、また、それに対処する住宅政策によって、ここ二十年間に日本の居住環境は著しく変化した。すなわち、中高層住宅の激増である。その推移をみると、大きく三期に分けることができよう。

第一期 一九五五年に発足した日本住宅公団が、翌年から都市周辺に「2DK」中心の中層（4〜5階）賃貸住宅を建設しはじめた数年間である。当時の一般住宅事情からみれば、この公団住宅は、水洗トイレ、ガス風呂、ステンレスの流し台——と、文化的生活のシンボルでもあり、その住民は「団地族」とよばれもした。

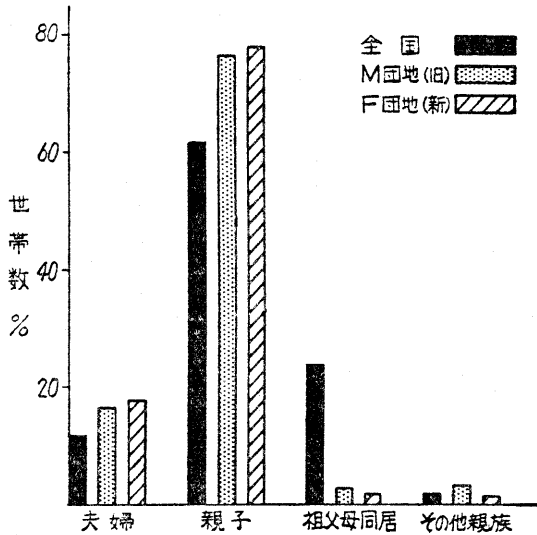
第二期 都市郊外に大団地が建設された六〇年代である。この時期は地方都市の公社も民間建設会社も中層住宅建設にあたり、中層住宅が急増した時期である。この間、「団地っ子」「鍵っ子」と子どもへの影響がとりあげられるようになった。

第三期 七〇年代には、「2DK」で誕生した子どもたちも小学生、中学生となり、需要とともに「3LDK」「4LDK」と一戸の面積の広さが多様になった。また、賃貸から分譲に主流がうつった時期でもある。これはこの種の住宅への人びとの定着を意味するものである。さらに、この時期は、6階以上のエレベーター附帯の高層住宅の建設、建設地の市街地への移行、そして民

第1図 5歳階級別年齢分布(率)



第2図 家族構成



間のいわゆる「マンション」建設ブームが特徴である。多様化の時期ともいえる。

以上のような変容を経ながら、中高層住宅人口は増加し、現在もなお増加しつつある。

このような居住環境は子どもにどのような影響をもたらすだろうか。つぎに、育児環境としての中高層住宅特性および問題を

さぐってみたい。

団地の家族構成と育児

大規模な団地やニュータウンは、人工的に急速につくり出された地域社会である。中・高層住宅が集合して特有の居住環境を形

成している。われわれは団地の特殊性とこれら諸条件のなかで成長する子どもたちの実態調査をおこなった。そのひとつとして、設立後十年の団地と新設の団地の居住状況を比較してみた。第1図にみるように、両者とも、親と子の年齢に二つの山をもつ分布で、二世世代家族の姿を示している。新設団地は年齢が若く、団地の設立年度や居住空間に規制されて、同質的家族が密集していることを示している。また、祖父母同居家族は全国平均二四％に対して三％、子ども数は全国平均二・六二人に対し一・五八人と団地の核家族状況が明らかであった。

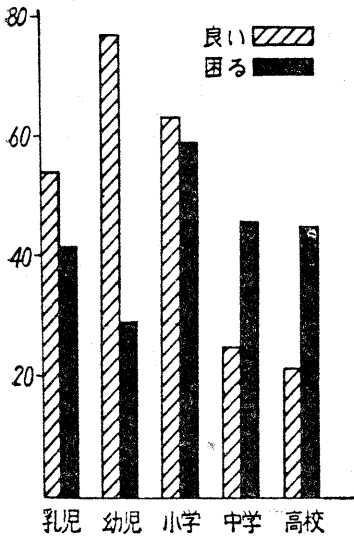
このような核家族化は、子どもへの期待や保護が過剰になり、脆弱な子に育てることにつながっていく。また、嫁・姑のトラブルがない一方、先行世代の経験を頼れず、育児不安をまねくことにもなる。しかし、核家族化は全国的な傾向ともいえる。団地の特性は、核家族化より、むしろ、同質家族ということにある。つまり、生活水準・生活形成の類似した同年齢の親たち、そして同年齢の子どもたちが密集していることである。親同志のサークル活動、子ども同志の遊びなどなまづくりが發展する一方、互いの比較や競争なども問題となることが多いのである。

子どもの養育への影響

母親の意識調査から、「乳児」「幼児」「小学生」「中学生」「高校生」の五つの各時期にわけて、団地でのしつけ上の問題を検討してみた。

乳幼児期は、よい点の方が困る点より多く、小学校では、よい

第3図 しつけ上の良い点、困る点



悪いがほぼ同じであるが、中・高校時代では困る点が多くなっている。

内容の詳細は割愛せざるをえないが、各年齢期とも、(1)環境、(2)設備(室内・屋外)、(3)人間関係(母親・子ども)、(4)家庭生活、(5)その他の項目ごとに、良い点、困る点をそれぞれ集計した。その主なものをひろってみるとつぎのようになる。

乳児期——日当り、室内温度調節、騒音が入らない、泣いても気がねないなどの設備が良い。母親同志育児の相談ができる、他の子と比較できる、集会所の健康診断がうけられるが良い。他の子と比較してあせる、芝生に入れないのが困る。

幼児期——屋外の遊び場の設備、友だちが多いが良い。せまい、4～5階が危険、不便である。階下にひびくので子どもを叱ることが多い、他の子と比較してしまふ、友だちのまねをする、友だち相互の家の出入りが多い、母親同志の関係がむずかしい。小学校——母親同志が連絡、相談しやすい。留守番や合理的生活をさせることができるのがよい。子どもの社会性がのびる。困るのは友だちとあそびすぎ、子ども部屋がとれない、せまくてのびのび育てられない、動物がかえない。

中・高校生——個室がとれない、親の生活と密着しすぎる、のびのび育てられない、家事手伝いをさせられない、屋外設備がな

い。

以上、団地生活と子どものしつけを考えてみると、団地の各戸の構造、広さ、設備が乳幼児に適しても、青少年にすみにくい状態であることが明らかである。この調査は2DK中心の団地であり、現在は、おなじ中・高層住宅でも子どもの個室をとれる構造のものが多くなっている。一方、プレハブをとりいれた最近の建築は、乳幼児期の音の反響が問題になってきている。また、市街地の高層住宅では、幼児期に友だちがいなことがなやみとされている。

戸外あそびへの影響

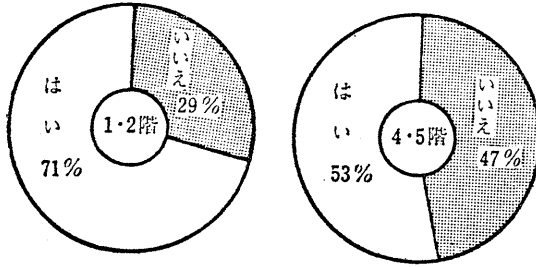
1・2階と4・5階を対照して、3歳児の外あそびを比較すると、図のように、明らかに差がみられる。外あそびの一日の平均時間、平均回数も4・5階が少なくなっている。

最近の高層住宅では、さらにこの傾向は強くなり、上層階の子どもの戸外あそびは消極的になっていると考えられる。

× × ×

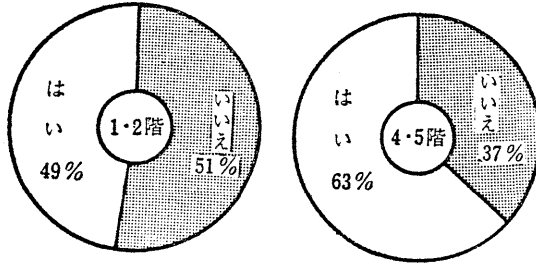
戸外あそびを十分させているか

第4図



戸外あそびにつきそっていくか

第5図



中・高層住宅の特徴は、ドアのカギひとつで外部の社会から遮断されているという心理的条件がある。それは家族単位の孤立性ないし独立性の意識となる。一方、中・高層住宅は同質家族が隣接し密集しているのである。ドアの外に意識を向ければ新しいコミュニティをつくりたいける。新しい生活環境は、新しい生活意識の形成を必要とする。中・高層住宅での育児の問題は、この親の意識の問題にかかわっているといえよう。

(日本総合愛育研究所)

*
*
*